

エリック・サティに導かれて

藤谷治

夕日書房の山野浩一氏からの年賀状に、サティの小説を書いてくださいと書かれた一行に惹きつけられたのが、そもその始まりでした。

僕が音楽専門の高校に通っていたのは、もう何十年も昔のことですが、その高校で最初にサティを弾いたのはこの僕です。それはもう、胸を張って主張いたします。その頃はサティを知っている人もほとんどおらず、僕はレナード・バーンスタインの著作『音楽のよろこび』に付いていた『ジムノペディ』数小節の符例をピアノで叩いて魅了され、横浜のヤマハで黄色い表紙の輸入楽譜を手に入れたのでした。一九八〇年かそこらのことだと思えます。教室や練習室のピアノで繰り返し『ジムノペディ』を弾いていると、ピアノ専攻の女子生徒たちからは「ムード先行の、簡単な曲」と軽視されたものでした。

そのうち北野武監督の映画に使われたりして、サティの音楽は次第に世の中へ浸透していききました。僕は内心、時代が追いついてきたなと思っていました。しかしその頃にはもう、僕は音楽の道を諦めていました。

大学で映画の勉強をしているときに、僕はもう一度サティと再会しました。ルネ・クレール監督の初期作品『幕間』の中に、フランシス・ピカビアやマルセル・デュシャン、マン・レイといった当時評判の前衛芸術家と共に、サティが登場するのです。これはサティが作曲したバレエ『本日休演』の幕間に上映された短編映画とのものでしたが、当時はバレエ全編を知ることにはありませんでした。ぼろぼろのフィルムの中で、サティは山高帽をかぶって貧弱なジャンプを試みたりしていました。

それからまた何十年も経って、僕は小説家になりました。妻が実家からアップライトのピアノを運んできて、僕は改めてサティの楽譜を開きました。高校生の頃に弾いた『ジムノペディ』や『グノシエンヌ』『あなたがほしい』などを、思い出しながら弾くようになりました。山野氏から年賀状が来たのは、それからさらに何年ものちのことです。少し大きさにいうなら、僕は過去から呼びかけられたような気持ちになりました。

しかし、それだけのことです。僕はサティの専門家でもなんでもなく、それどころか高校卒業以後、サティについては何も知らずとしていました。多くの人たちと同じく、僕もサティを、「BGMみたいな曲をいろいろ作った、昔の人」という程度にしか知りはありませんでした。

だからまずは、少しでも知る必要がありました。あたう限りの楽譜やCDを集めて、足りない分は動画サイトに頼って、サティの全作品を繰り返し聴きました。またサティは自作におかしな表題をつけることで知られていますから、その表題もほとんどノートに書き写していききました。

評伝や評論、サティ自身が書いたものも読みました。サティについてはジョン・ケージ

も、ジャン・コクトーも、高橋悠治も書いています。けれどもそういった立派な芸術家が、立派な芸術家として遇しているサティに、全作品を聴いたあとの僕は、なんとなく満足できないものを感じました。

確かにサティは立派な芸術家です。ワーグナー全盛のパリで静謐な音楽を作り、単調な反復と反ドイツ的な和声法で独自の音楽を作り上げました。『ノクチュルヌ（夜想曲）』や『冷たい小品集』、そしてあの『ソクラテス』といった、息をのむ偉大な、そして真に孤独な作品も残しています。

しかし一方で『あなたがほしい』『びっくり箱』『行こう、シヨシヨッテ！』といったシヤンソンやラグタイムを思わせる音楽はどうでしょう。それこそ『幕間』のちに喜劇の名手として興行的成功を遂げたルネ・クレール作品の付随音楽が似合いそうな、軽快で賑やかで、パリの軽薄を代表するような音楽をもまた、サティは量産したのです。子細に見ればそのような音楽も、決しておざなりなものではなく、細やかな工夫がみられる見事な作品ですけど、それをもってサティの反骨精神とか前衛芸術とか、僕は思いません。サティにはチャラついたところがあると思います。

孤独と軽薄は、芸術家にとって珍しい同居ではありません。とりわけ作曲家にはハイドゥンとモーツアルトという、偉大な先例があります。さらにサティの音楽には、あの愉快な「ベル・エポック」への追憶が強く刻印されています。それはモーツアルトの音楽にある「ロココ」への追憶と同種の趣味でしょう。モーツアルトの時代がロココからロマン派の萌芽へと続いたように、サティの時代はベル・エポックからシュルレアリスムの誕生へと続きました。そこで彼はディアギレフやコクトーやピカソと共にバレエを作り、もって時代の寵児ともてはやされました。

恐らく、シュルレアリスムはサティの軽薄趣味とウマが合ったのです。『風変わりな美女』や『メルキュール』を作るのに、彼は自分のカン・カン踊りへの愛着を捨てる必要を感じていません。意識下の混沌を表現しようと目指すシュルレアリスムのありようは、サティにとつて「へんてこりんなものを作りたい」「ご大層な連中に馬鹿なものを与えてやれ」という衝動と、大差なかったのでしょう。

このサティ解釈が「正しい」かどうかは、僕の関心の外にあります。とにかく僕はサティの音楽をそう捉えて、小説に活かそうと考えました。すなわち軽薄で、孤独で、突拍子もなく、明るくて、陰気で、芝居がかって、真面目で、ふざけている小説を目指しました。

もしもその企てが巧くいっているとしたら——それはもちろん、読者の皆様の判断にゆだねられるわけですが——、それはすべて、かの偉大なるエリック・サティの音楽のおかげです。僕は彼の音楽に導かれて筆を動かした、雇われ作者にすぎません。したがってこの小説に関する榮譽はサティ氏に、報酬はワタクシに、ということになるのであります。